

### 第3 問題作成部会の見解

#### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 言語を手掛かりとしながら、文章の内容を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて、情報を的確に理解したり、より効果的な表現に向けて検討、工夫したりする力などを求める。近代以降の文章（論理的な文章や実用的な文章、文学的な文章）、古典（古文、漢文）を題材とし、言葉による記録、要約、説明、論述、話し合い等の言語活動を重視する。

問題の作成に当たっては、題材の意義や特質を生かした出題とするとともに、大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する。

#### 2 各問題の出題意図と解答結果

第1問 本文は、櫻井あすみ『贈与』としての美術・ABR（小松佳代子編『美術教育の可能性 作品制作と芸術的省察』勁草書房、2018年発行）からの抜粋である。出題箇所は、櫻井が幼少期の美的体験と自身の美術制作の関係を、「交換」と「贈与」の考えを用い、芸術的体験の根源的問題へと拡大し考察した文章の一部である。主観的個人的な美的思念が、客観的一般的な問題に昇華される論述過程が読みどころである。社会は一般に等価な「交換」を基本とするのに対し、芸術は言語的に理解不可能な「わかりえなさ」を内包する不等価な「贈与」を基本とすると考える筆者が、その「わかりえなさ」が「美しさ」を生み出し、固定化された自己と世界の枠組みを揺るがすさまについて論じている。タイトルにある「ABR」は Arts-Based Research の略で、「芸術に基づく研究」が、受験者にとって、従来の社会科学的思考の問い直しのみならず、社会や他者、美との関わりの捉え直しにつながる契機となるよう工夫して作問した。

問1は、漢字問題。問2～問6は本文読解の問題である。問2・問3では、本文の内容を的確に理解しているかどうかを問うた。問4では、本文の展開の仕方を問うことで、本文の構成の特徴を捉えさせた。正答率は約42%と低めであった。問5は、筆者の述べる考えに注目させつつその内容の理解について問うた。問6は、本文の中心となる話題について本文全体を踏まえた理解を問うた。第1問の得点率は約64%であった。

第2問 本文は、遠藤周作『影に対して』（生前未発表）による。本作は、妻と息子を翻訳の仕事で養う勝呂の約半年にわたる出来事が描かれており、その物語現在に対してほぼ交互に、母との思い出の回想が挟まれつつ展開する構成となっている。出題箇所は、大連で過ごした幼少期に、自身が入院したときのことを回想するところから始まっており、母との思い出を回想しては現在の自分の生き方について考えるようになる場面である。なお、問6において、本作の別の箇所である「母の最期」と「勝呂に宛てられた母からの手紙」を取り上げた。本問は、少年時代には気づかなかった母の心情について思いを馳せたり、母が抱えていた人生と実生活との葛藤について自身の問題として捉え直したりする勝呂の内面を読み取らせる出題とした。

問1は、入院中の勝呂がヴァイオリンについて頭から離れない母に対して抱いた心情を問うた。正答率は約90%。問2は、「平凡」を重んじる父のありようとそれゆえに家庭内で求められる母のあり方について問うた。正答率は約84%。問3は、本文中に繰り返される「哀しそうな」「哀しそうに」といった表現に注目し、ヴァイオリンを弾かなくなり、家庭の仕事を行うなかでの母の心情を問うた。正答率は約67%。問4は、往時の勝呂には分からなかった、友人に対

する母の返事に隠された実際の心情を問うた。正答率は約80%。問5は、本文における特徴的な表現について問うた。正答率は約57%。問6では、生徒の【ノート】と対話から出題する形として枝問(i)(ii)の2題で問うた。(i)では、母の生き方はどのようなものであったかについて問い、(ii)では、「母の死顔」が「まるで残酷な悪戯のように」浮かんできた勝呂の受け止め方について問うた。(i)の正答率は約64%。(ii)の正答率は約53%。第2問の得点率は約70%であった。

第3問 絵本と大人向けの本を読み比べ、絵本で用いられている工夫について自分の意見を書く学習場面を設定した。実用的な文章や図表の読み解きだけではなく、書く力を問う設問にした。絵本『イワシ むれで いきる さかな』と、その絵本の編集者の発言が確認できる本、イワシを話題にした大人向けの本を資料として示した。作問に当たっては、下書きにおける表現や構成を見直ししながら、複数の資料を比較するとともに、「書くこと」の活動の見通しを持つという学習過程を意識した。

問1・問2は、資料の情報から分かることをもとに、自分の文章の表現や、構成に合った内容を適切に考える力を問うた。問3(i)は、イワシに関する二つの本を比較し、それぞれの本の特徴について適切に判断する力を問うた。問3(ii)は、全ての資料の情報を関連づけながら下書きの内容を更に深める力を問う問題として設定した。第3問の得点率は約61%であった。

第4問 素材文とした『うつほ物語』は、平安時代中期の成立と考えられる物語文学である。その内容は、〈清原俊蔭—娘—藤原仲忠—いぬ宮〉という秘琴の一族の物語と、あて宮をめぐる求婚譚や立坊争いの物語とが組み合わせられた複雑なものとなっている。出題箇所は、主人公・仲忠とその妻・女一の宮との間にいぬ宮が生まれた場面である。琴の一族を継承するいぬ宮のために、俊蔭の娘(祖母)と仲忠(父)が秘琴の一つ「龍角風」を弾くさまが描かれており、秘琴伝授という『うつほ物語』の主題が示された象徴的な場面であると言えよう。琴の演奏による奇瑞という物語文学ならではの伝奇的な要素に触れてもらうとともに、古典文学の特質への理解を問うことを意図した。

問1は、本文の読解に必要な基本的な単語の知識及び内容を理解する力を問うた。問2は、基本的な文法の知識及び本文の表現を根拠に、本文の内容を理解する力を問うた。問3は、第1段落について、登場人物のやり取りを正しく理解できているかを問うた。問4は、第2段落と第3段落について、仲忠と俊蔭の娘との琴の演奏についての説明を正しく読み取ることができているかを問うた。問5は、本文で描かれていた俊蔭の娘の琴の演奏について、右大臣と帝が後日交わした会話文を複数素材として示したうえで、本文の内容を正しく理解できているかを問うた。第4問の得点率は約46%であった。

第5問 本文は、江戸後期の儒学者である長野豊山の『松陰快談』によった。日本漢文ではあるが、同書は清朝にて出版された昭代叢書に収録されており、近代の学者・森銑三によって、近世漢文の随筆中では最も優秀なものの一つと評価されたものである。本文の内容は三つの段落に分けられる。第1段落は作詩の模範を唐詩に求めるか、それとも宋詩に求めるかについての筆者の立場の表明である。第2段落は前の段落を承けて、詩の巧拙ではなく唐詩重視か宋詩重視かという党派にとらわれて争う人々に対する筆者の批判である。第3段落は漢詩の創作・鑑賞についての筆者の考えを論じたものである。

教科書には唐詩と宋詩が教材として採用され、近年は日本漢詩も一定の割合で採用されている。しかし大部分の高校生は、なぜ唐詩と宋詩及び日本漢詩を学ぶ必要があるかを自覚しないまま学習していると考えられる。本文は、漢文を論理的に読解することに加えて、近代以前の日本人が唐詩・宋詩を学び、自らの創作の模範としたことも知る契機となるだろう。また、本文は他者との対話、ならびに文章の創作に関する啓発的な内容を持ち、受験者に有用な面も具

えている。

各設問では、「言語文化」の内容を踏まえ、基本的な句法や漢文特有の表現を理解しているか、文章の内容や構成、展開及び作者の主張が的確に捉えられているかを問うた。また、【資料】として『松陰快談』の別の箇所での鑑賞について述べている文章を示し、本文の内容と合わせて筆者の考えを適切に読み取ることができるかを問うた。問1は漢文の基礎的な語彙について、文脈に即して理解できるかを問うた。問2は部分否定や二重否定の句法を理解したうえで、文脈に応じた理解ができるかを問うた。問3は返り点と書き下し文についての理解を問うた。問4は漢文の基礎的な句法について文脈に即して理解できるかを問うた。問5は第3段落の構成を踏まえて傍線部の内容を把握できているかを問うた。問6は第3段落の内容を末尾の比喩に即して理解できているかを問うた。問7は本文及び【資料】の内容が理解できているかを問うた。

問3については、正答率が約17%と極端に低い。受験者の解答状況を勘案するに、漢文の句法と前後の文脈に即した解釈を正確にとれていない者が多かったことが考えられる。本問と同じように、返り点と書き下し文の正しい組合せを問う小問は昨年度の本試験でも出題されており、正答率は約15%であった。今回の正答率は昨年度を上まわっているが、受験者がこの形式の小問を苦手とすることが窺える。第5問の得点率は約52%であった。

### 3 自己評価及び出題に対する反響・意見等についての見解

第1問 論理的な文章の内容を的確に読み取る力や思考力を確認するうえで適切な素材文及び問題であったと評価された。問1の漢字問題は、正答率が高い問題が多かった点は課題である。語彙の側面から判断する問いの出題にも期待したい、という指摘もあった。問6は「わかりえない美しさ」という本文の主題とも言える言葉について、本文全体の構成や論理の展開を踏まえての理解を問うた点では適切な出題であったと評価されたが、正答選択肢において「贈与」への言及がやや薄かった点、学習の過程を重視した場面設定等が昨年に引き続き見られなかった点は課題であるとされた。また、全体としてセンター試験時代と同様の形式との指摘もあった。

第2問 本文の時代背景への理解に加え、文学的な文章の構造と内容を把握する力や、登場人物の心情を精査・解釈する力を確認するうえで、適切な素材文及び問題であったとの評価を得た。特に、探究的な学びの過程につながる問6は、学習指導要領に沿った良問であるとの高評価を得ることができた。一方で、語彙に関する出題を見送ったことについては今後の出題を期待する要望があった。「言語文化」の指導目標に鑑みて出題を引き続き検討すると同時に、「言語文化」の〔知識及び技能〕を問う出題方法として、素材文に影響されない他の可能性を模索していくことも重要であると考えられる。

第3問 学習指導要領の「書くこと」の学習過程に即した素材文及び出題であったという評価を得た。他方、問3(i)については選択肢の数が多く、複雑で必要以上に解答に時間を要するという指摘があった。複数資料を読むことの必然性がより感じられる設問にする工夫が必要であった。また学習活動については、より完結したものを示すべきという指摘もあった。学習活動としてのまとまりをもたせることと、探究的な学習の過程を示すことの両立は、条件的に難しい面がある。たとえば手持ちの資料で言えることの限界を確認したり、自身の論を批判的に検討したりすることに焦点を当てると、「完結」した学習活動という印象は薄らぐものとなる。適切に受験者の力を測るため、特定の出題傾向によることなく、さまざまな資料をもとにバリエーション豊かな作問を続けることが必要であると考えられる。

第4問 人物関係図や注を参考にして古文を的確に読み取る力や、複数のテキストを踏まえて内容を把握する力を確認するうえで適切な素材文であったとの評価を得た。また、問5は、本文の内容を引用文と結びつけることでより多角的な視点から解釈させる問題であり、生徒の興味関心を喚起し、主体的な学びへとつなぐ高等学校の授業の場面が想起できる出題であったという評価も得られた。

一方で、注の分量がやや多かったとの意見もあった。注の数自体は従来の共通テストと比較してことさらに多いわけではないものの、今回は人物関係図も掲載したため、注と本文を見開きページ内におさめられなかったことは反省点である。また、文語のきまり等に関して、「言語文化」の学習範囲を越えない出題の検討が必要であるとの意見もあった。「言語文化」の学習範囲をどう捉えるかは明確な規定がないため難しいところであるが、文法知識と文脈理解のバランスについては、今後も作問に当たって検討を加えていくべき問題であろう。

なお、第4問の得点率約46%は他の大問と比べるとやや低く、とりわけ問4・問5の正答率が低かったが、これに関しては当該選択肢が5択であったことも関連すると考える。全体の評価としては、分量、設問数はおおむね適切であり、難易度も適切であったとの見解を得られた。

第5問 学習指導要領においては、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにすること、ならびに我が国の言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について理解することが求められている。上記の視点に合致するものとして日本漢文を素材として出題した。本文と【資料】には、日本漢文になじみがない受験者がいる可能性を考慮して、丁寧な注を付すことを試みた。また、受験者が学習によって習得した能力を正確に測ることを心がけた。

素材文については、注が丁寧に付されており、漢文に用いられる基本的な知識や句法をもとにして的確に読み取る力を確認するうえで適切な素材文であったとの評価をいただいた。

設問についてもおおむね適切・妥当との評価をいただき、特に第3段落の理解を問う問6については、工夫して選択肢が作られている良問であると評価していただいた。ただ、問7では【資料】に付されている注が正答を出しやすくしている旨の意見もいただいた。正答率が低かった問3については、②と⑤が紛らわしいとの指摘をいただいたが、語句や句法の知識だけでなく、前後の文脈から判断させる意図を含んだ適切な問題であったとの評価もいただいた。

その他、問5について、実質2択の問題になっており、選択肢の作り方が単純なのではないかとの意見をいただいた。この問題の正答率は約44%であり、問3の次に正答率が低い。受験者の解答状況を勘案しても、前後の文脈を的確に把握する必要があり、決して解きやすい問題でなかったことは明らかである。その他にも一部の問題の難易度について意見をいただいたが、第5問全体のバランスを考えると、難易度はおおむね適切である。また、各設問の識別力もおおむね高く、共通テストとしてふさわしい問題であったと考える。

#### 4 まとめ

第1問 本問では、文章を的確に読解する能力を問う問題を設定した。素材文・出題内容・難易度は適切であった。大問としての得点率も適切であり、学習成果が反映される内容であったと考えられる。今後も設問の難易度に配慮しつつ受験者の学習の成果が的確に測れるような問題作成に努めていきたい。出題の形式やねらいについては、今後とも多面的・多角的な視点から検討を重ねていきたい。

第2問 総じて学習指導要領に沿った問題作成がなされたと考える。かつ、内容・分量・難易度においても適切な出題であった。今後も生徒が現代の国語科教育の場で身につけた力を評価することができるような問題作成に努めたい。さらには、共通テストにおける出題が授業改善に

役立ち、生徒の読書への誘いは勿論のこと、言葉を通して他者や社会に関わろうとする力を育成することに資するものとなるよう心がけたいと考える。

第3問 複数資料をもとに書く内容を検討したり、書いた文章を推敲したりするという生徒の学習活動を想定した出題であった。実用的な文章を主な素材とした大問の出題はまだ2回目であり、今年度の出題においてはいくつかの課題が指摘されたが、問題内容としてはおおむね適切なものであったと考える。今後もさまざまな工夫を取り入れながら、受験者が日頃の学習活動で身につけた力を適切に測る問題となるよう心がけたい。

第4問 古文単語や文法といった基礎的な知識を問う設問から、人物関係を整理して本文の内容を正確に読み取る力、複数のテキストを踏まえて本文の内容を再検討する設問まで、多様な問題を出題しており、古文の学習成果を確認するのに適切な問題であったと考える。

一方で、追・再試験との難易度のバランスの面や、文語のきまりに関する設問については課題が残った。文法知識と文脈理解の両側面にバランスよく触れつつ、適正に受験者の力を測れる作問を引き続き心がけたい。また、今後も多様な素材を吟味し、古文の特質や魅力を伝えながら受験者の学力を適切に測る作問を目指して努力を続けていきたい。

第5問 基本的な語彙や重要な句型などの知識を問う設問から、二つの文章を読み比べて筆者の漢詩に対する考えを読み取る設問に至るまで、多様な形式の問題を出題したことにより、受験者が身につけた力を測るのに適切な問題となった。今後も、難易度を考慮に入れて素材文を選定し、受験者の学習成果を適切に測れるような良問の作問に努めたい。